

すてきな大分を見つけ、伝えよう！

2026.3.10



ルイス・デ・アルメイダ生誕 500 年記念 講話会の報告

～『戦国のメリークリスマス』～海を越えた永遠の友情～

昨年は、アルメイダが生まれて丁度 500 年という記念すべき年でありました。大分市ではこれを記念したフォーラムや大分市歴史資料館においての特別展が開催されましたので、アルメイダに関する理解を新たにされた方も多かったことでしょう。

この記念すべき年にすてきな大分を伝える会では、去る 11 月 29 日 NPO 法人大友氏顕彰会 副理事長の佐藤弘俊様（写真）をお迎えし、アルメイダの生涯を学ぶとともにアルメイダと大友義鎮（宗麟）との友情を描いた演劇『戦国のメリークリスマス』～海を越えた永遠の友情～（2017 年公演）DVD を視聴し、共に考える貴重な時間を持ちました。

今回は、その要旨をご報告させていただきます。

（注）アルメイダの写真は、大分市医師会提供のものです。



（佐藤講師）

1. アルメイダの生涯（府内病院建設まで）

（1）アルメイダは、今から 500 年前の 1525 年にポルトガルの首都リスボンで、貿易商の子として生まれました。祖父の代までポルトガル国王の侍医を務めた名門の家柄でした。21 歳の時に外科医と医学教授の免許を取得し、23 歳でインドのゴアで王立病院の外科医師として勤めました。24 歳の 1549 年のことですが、日本にキリスト教を伝えたザビエルが、このゴアから出港しております。

（2）間もなく親しくしていたガマ船長の娘マダレイナが熱病に罹ります。アルメイダは、必死の治療に当たりましたが、その甲斐なく死去してしまいます。この大きな衝撃を受けたアルメイダは、医師を辞め、貿易商に身を転じたのでした。その後、彼は貿易商として商才を発揮し巨万の富を得たのでしたが、多大な富を得ても何か満たされないものを感じていたのでした。

（3）シンガポール沖を航海していた時のことです。座礁船を発見し、その中にヌニエス神父が乗船していました。負傷した船員を放置できずアルメイダは治療に当たります。アルメイダのその治療ぶりを見て感心したヌニエス神父は、アルメイダに「あなたは止めている医師の仕事を人々のために役立てるべきだ。それが天に与えられているあなたの職分です。」と語ります。アルメイダは励まされたのでした。

アルメイダにとってヌニエス神父との出会いは、その後の生き方に大きな影響を与えるものとなりました。アルメイダが豊後を訪れたのはこのような時でした。

(4) アルメイダ(30歳)が豊後を初めて訪ね、そこで見たものは、飢えと貧困のため幼い命が失われる惨状でした。彼は、この現状に非常に心を痛め、豊後に定住することを決めます。これには身内から強い反対がありましたが、アルメイダの意思は固いものでありました。

彼は、領主大友義鎮(宗麟)に育児院の設立を進言し、許可を得ます。そして私財を投じ孤児の収容施設をつくりまたその教育費用も負担し、失われていく孤児の命を救いました。更にまた多くの病人たちの姿を目の当たりにして病院の必要性を痛感し、その設立に向け没頭したのでした。

(5) アルメイダは、1556年31歳の時、イエズス会に入会します。イエズス会のトルレス司祭の理解を得て、大友義鎮(宗麟)に病院建設を願い出ます。義鎮はこれを許可し、場所も提供したのでした。

当時は病気感染を心配し病院建設に反対する意見もあったようですが、建設が実現できたのは、義鎮(宗麟)の理解と協力があつたことが大きかったのです。

アルメイダは、自分より年が若いながらも西洋文化を理解する英邁な大友義鎮に深い尊敬と親しみを抱き、これから豊後で進めようとする人命救済の医療事業に夢を膨らませたとされます。

(6) アルメイダは、私財を投じて病院を建設します。病院は、外科と内科に分かれ、また、治すことが困難とされていた皮膚病患者の治療棟、更には産科や眼科もあったといわれます。彼は、ここで、医師を務め、漢方薬に詳しい日本人医者(パウロ・キョウゼン)とともに治療に従事したのでした。この府内病院は、西洋医学と東洋医学の治療が融合した当時では世界でも稀な総合病院だったとみられています。

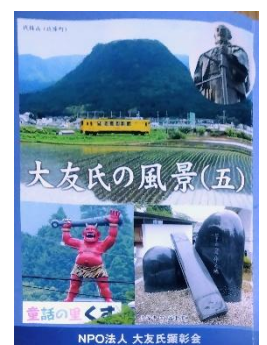


(講話を聴き入る皆様)

また、この府内病院では、人手が足りないので、クリスチャンたちは無報酬で手伝っており、驚くことにこの時既に個人としてではなく、組織として活動し、規則や会計、活動計画なども

作られていたといわれます。府内病院は、ボランティア発祥の地でもあったとみられています。

表題の『戦国のメリークリスマス』は、豊後府内のこの府内病院が舞台となっており、大友義鎮(宗麟)とアルメイダとの間に築かれた国を越えた友情を描写した物語です。講師佐藤弘俊副理事長自らが、書き上げた創作劇です。真実味が伝わる素晴らしい内容でした。平成29年(2017)にコンパル文化ホールで公演され、その台詞は『大友氏の風景』(五)に掲載されていますのでご覧ください。



2. 物語《戦国のメリークリスマス》主なあらすじ

(NPO 法人大友氏顕彰会刊)

アルメイダが開いた府内病院にユリアという一人の体調のすぐれない少女がいました。彼女は数年前に空腹で息も絶え絶えのところをアルメイダに助けられた身内もない不憫な少女でした。

ユリアは、アルメイダよりキリストの誕生日(クリスマス)にその祝いがあり、その日には聖書物語の演劇があることを知り、これを非常に楽しみにして快復に励んでいたのです。ところが、ユリアは、アルメイダの治療の甲斐なく、クリスマスの祝いを前に天に召されてしまったのです。

アルメイダは、「たった一人の少女の命すら救えなかった。」と自らを攻め、落胆してしまいます。この様子を知った義鎮（宗麟）は、アルメイダに「それは違うぞ。ユリアの命は救えなかったがあの子の心は救うことができたのではないか？」と励ましたのでした。

義鎮は、さらに「人の温かい心というものを知らずに生きてきたユリアは、そなたからたくさんの愛の心ももらい天国へ帰ったのではないか？」とアルメイダに諭（さと）したのでした。何よりも嬉しい義鎮のその言葉にアルメイダは、感激し、元気を取り戻すことができました。

丁度その時、義鎮とアルメイダの目の前にひらひらと雪が舞い降りてきました。義鎮は「ユリアからの返事とは思わないか」とその感動をアルメイダに伝えたのでした。

この日は正にクリスマスでした。“戦国のメリークリスマス”でした。義鎮とアルメイダの間に、海を越え“永遠の友情”が結ばれた瞬間でもありました。



義鎮役とアルメイダ役
（『大友氏風景』(五)より）

以上は、物語のあらすじです。創作ではありますが、義鎮（宗麟）とアルメイダの友情が実感として伝わって参ります。当日は、実際に公演されたDVD録画を上映して下さりその感動を皆様に伝えてくださいました。

また、佐藤講師より「実際にアルメイダが残した書簡にも、(立花道雪を)『王(宗麟)の次に最良の友』であると記載しており、宗麟を最良、最高の友と認識し、強い友情を感じていたことがわかります」とのお話がありました。

3. アルメイダの後半の生涯 ～開拓伝道師として晩年まで～

(1) 医療禁止令が本国より届く 1560年 (アルメイダ 35歳)

病院の運営も軌道に乗り始めた頃のことですが、ポルトガル本国から聖職者の医療禁止令の通知が届きます。「人間の魂の永遠の救済こそが聖職者の真の職務」として医療行為や裁判官になってはならないというものでした。アルメイダは、病院を継続したい気持ちは当然あったと思われそうですが、これを機に府内病院の外科医を離れ、自らは、開拓伝道師となって九州の博多や長崎、大村、島原等各地を精力的に回り布教活動に専念して行ったのでした。

(2) 以降のアルメイダの年表

1561年 (36歳) 博多から度島、生月島、平戸方面へ 秋に豊後に戻り朽網、鹿児島へ

1562年 (37歳) 豊後に戻り、博多経由で横瀬浦へ

(義鎮、出家して宗麟と名乗る。府内から白杵に実質的に拠点を移動)

1563年 (38歳) 島原・口之津へ 大村純忠が洗礼を受け初のキリシタン大名に

1564年 (39歳) ルイス・フロイスと堺、京、奈良へ

1565年 (40歳) 畿内から豊後府内、白杵、島原、大村、口之津、福田を駆け巡る

1566年 (41歳) 五島、下天草、志岐への布教、白杵で教会堂落成式、降誕祭へ出席

1567年～1568年 (42歳～43歳) 長崎方面

- 1569年（44歳） 大友氏、毛利との決戦 11月口之津から宗麟のいる日田へ 火器弾薬支援
毛利との決戦で、毛利は九州から撤退
- 1570年（45歳） 大友宗麟と大村純忠との調停を成功させる
大友氏各将を訪問し、大村を攻めないよう根回しに奔走した
- 1571年（46歳） カブラル布教長と河内浦、博多へ
- 1578年（53歳） 島津藩に追われた日向伊東氏が豊後に逃げ込む
宗麟、白杵で受洗、洗礼名ドン・フランシスコ
大友氏日向遠征、耳川合戦にて大友氏大敗
同行していたアルメイダ、重病の中、命からがら豊後へ逃げ帰る
- 1579年（54歳） ヴァリニャーノ来日、口之津へ
- 1580年（55歳） 豊後で第一回宣教師会議 マカオで司祭の叙階を受ける
- 1581年（56歳） ヴァリニャーノ、豊後府内にコレジオ（修学用・大学相当）建設
- 1582年（57歳） ヴァリニャーノの命により天草全島の教会責任者に 天草領主を看病、
その死を見届け、病の床に
2月 天正遣欧少年使節団、長崎を出帆 6月 本能寺の変
- 1583年（58歳） 天草河内浦（現在の河浦町）で他界する「生の終りまで主に仕えん」
*宗麟 1587年 豊後津久見で逝去（57歳）

(3) 走り続けたアルメイダの後半の生涯

医療禁止令が出された後の伝道師としてのアルメイダの行動は、「生ける車輪のごとく」とルイス・フロイスが形容したように休みなく働き続けた凄まじいものでした。終焉の58歳まで日本の地で移動した距離は、分かるだけでも実に2万1300km（地球半周相当）とされています。また、府内病院での医療従事から九州各地の伝道活動に転じて、アルメイダは、人命を守る医療は続けており、また宗麟との関係はますます強力なものになっていったのでした。このことから、アルメイダが終生大事にしたものは、変わらなかったのではないかと思います。

アルメイダは、最後まで日本を離れず、極東の地日本に骨を埋めたのでした。アルメイダにとり生涯の“最良の友”であった大友宗麟との出会いができたことは、何よりも大きな慰めであったことでしょう。アルメイダとも親しかったイエズス会士で日本の宣教師であったルイス・フロイスは、「アルメイダの名は日本において決して忘れられることなく、生命の書に記入されるであろう」と『日本史』に書き遺しています。
(文責 青井勝久)



(参加者の皆様と)

◎ 図書紹介



『ルイス・デ・アルメイダの生涯』
(著作 牧達夫氏)